

「墨子」号令篇の文書主義について

岡 本 光 生

## 「墨子」号令篇の文書主義について

岡 本 光 生

### 1 問題の提起

「墨子」号令篇は守城のさいの軍律を論じているが、この篇において、注目される論点はつぎの三点である。

- 1 城邑のすべての人民、老若男女が、守城の戦争に参加すること。
- 2 守城戦争のさいの情報伝達（上位者から下位者への伝達と下位者から上位者への伝達）が文書によってなされること。
- 3 官の民からの食糧・物財の調達は、官の発行する「券」を交付することによって行われること。

17  
小稿で、わたくしはこの三つの点を明らかにし、あわせて号令篇の発想が漢代初期の実務派官僚に受け継

がれていることにも言及したい。

なお、小稿は号令篇の成立年代、成立の問題をあえて考慮しない。これらの問題を考慮せずに、号令篇の発想を、号令篇それ自体において分析することによって、かえって成立年代、とりわけ成立の問題を解決する手がかりが得られるのではないかという方法論的期待があるからである。

注一 号令篇を読解するにあたっては、吳毓江「墨子校

注」、岑仲勉「墨子城守各篇簡注」、山田琢「墨子下」を参考とした。また「墨子」全般については、あわせて孫詒讓「墨子閒詁」をも参考した。

原文を改めた場合もあるが、その場合、重要なもののみ注記した。

## 2 すべての住民による守城

「墨子」号令篇につきのようにある。

女子、到大軍、令行者、男子行左、女子行右、  
無並行、皆就其守。

女子が大軍に加わる場合。通行するには、男子は左側、女子は右側を行き、男女が並び行くことはない。そして、みなその守備につく。

これによれば、城邑を守る戦いには、男性ばかりではなく女性も参加する。

さらに号令篇は、守城の戦いに勝利し、敵を撃退したさいの報償について、つぎのようにいう。

男子有守者爵、人二級。女子賜錢五千。男女老  
小無分守者、人賜錢千、復之三歲。

男子で守備の任にあるものは、それぞれに爵

位二級をすすめ、女子の守備の任にあるものは、錢五千を与える。男女の老少の守備の任なきものには、それぞれに錢千を与える。また賦役を免ずること三年である。

「男女老小無分守者」も報償を得る。かれらもまた、間接的であるにせよ、戦いにかかわり、勝利に貢献したからである。

守城の戦いに、老若男女を問わずして、すべての民が参加する、ということとは、戦いに敗れた城邑の民が、侵略者によってどのように処置されるのかをみることによっても明らかになる。

「墨子」非攻下篇はつぎのようにいう。

入其國家邊境、芟刈其禾稼、斬其樹木、墮其城郭、以湮其溝池、攘殺其牲、燔燼其祖廟、勁殺其萬民、覆其老弱、遷其重器。

その国家に侵入し、農作物を刈り取り、樹木を伐り、城郭を破壊し、溝や池を埋め、神に供える犠牲の動物を盗み殺し、祖廟を焼き、万民

を刺殺し、老幼を滅ぼし、宝物を奪い取る。

また天志下篇もつぎのようにいう。

入其邊境、刈其禾稼、斬其樹木、殘其城郭、以抑其溝池、焚燒其祖廟、攘殺其牲牷。民之格者則勁拔之、不格者則係累而歸。丈夫以爲僕圉胥靡、婦人以爲春曾。

国境に侵入し、農作物を刈り取り、樹木を斬り、城郭をそこない、溝や池を埋め、祖廟を焼き、神に供える犠牲の動物を盗み殺す。齒向かうものは殺し、齒向かわないものは捕虜として連れて帰る。男子は馭者や馬丁、刑徒として働かせ、女子は白挽きや酒造りとして働かせる。

天志下篇の場合、反抗したものは「勁拔」され、帰順したものは奴隸とされる。

守城の戦いに敗れることは、上述の事態を招くことになる。したがってすべての民が、みずからの生命とみずからの城邑を守るため戦うことは、当然である。

### 3 守城のさいの情報伝達

成年男女の人民を組織することによって成立した、守城のための軍事組織において、重要な情報は、文書によってすべての構成員に伝達され、明示される。

たとえば、ある部署を守る人間の名札をその部署の入り口に掲示する。不法侵入者をはつきりさせ、スパイの侵入を防ぐためである。

吏卒民、各自大書於桀、著之其署隔。

吏、卒、民は、それぞれにその姓名を木札に書いて、それをその部署に掲げる。

あるいは

人自大書版、著之其署隔、守必謀其先後。非其署而妄入之者、斷。

各人は、それぞれにその姓名を木札に書いて、

それをその部署に掲げる。太守はかならずその部署に到り、執務する始めと終わりとを査察する。所定の部署でない部署にみだりに入るものは、処罰される。

以上の記述からすれば、誰がどの部署にいるか、またいるべきかは、木札という文書によって明示されることになる。

文書によって情報が伝達される例としては、またつぎのものがある。

爲守備程而署之曰某程。置署術術衙階若門、令往來者皆視而放。

守備の規程を作り、その標題を「何々の規程」と名づける。そして道路や階段や門に掲示し、往來するものに遵守させる。

守備の規程を文書化し、陣營の各所に掲示し、兵士たちに周知徹底させる、すなわち情報は文書化され、公開されるのである。

文書化される情報は、上位者から下位者への一般的な命令ばかりではない。特定の任務の指令も文書によって伝達される。

#### 守節出入、使主節必疏書。(雜守)

太守の発行する身分証明書を持したものの出入。身分証明書にかかわる事柄を掌る役人に命じて、かならずその任務を簡条書きにする。

この記述によって、身分証明書を携帯した使者が、簡条書きされた上官の命令を現場に伝達することがあきらかになる。

下位者から上位者への情報伝達もまた文書によってなされる。

諸可以便事者、亟以疏傳言守。吏卒民、欲言事者、亟爲傳言請之。吏稽留不言請者、斷。

すべて利益をもたらすはずの事柄は、すみやかに簡条書きにして太守に伝言する。吏、卒、

民で上言したいものは、すみやかに伝言したい旨、担当の役人に願ひ出る。伝言を滞らせたり、あるいは伝言しなかった場合には、その担当の役人は処罰される。

以上は直接戦闘に参加するものの間の情報伝達が文書によってなされている例である。

#### 4 民の納粟にかかわる文書化

守城の戦闘は、敵の包囲、封鎖に耐える戦いである。戦いが長期にわたり、守備軍の備蓄していた食糧が不足するかもしれない。

号令篇は、そのような場合を想定して、つぎのようにいう。

度食不足、令民自占家五種石斗數、爲期、其在簿者、吏與雜嘗。期盡、匿不占、占不悉、令吏卒微得。皆斷。

守城のための食糧を計量して足りない場合に

は人民に命じてそれぞれその家の五穀の数量を見積もらせて、期限を定めて報告させ、その簿書に登記した数量を役人が確認しておく。期限が過ぎても、見積もりを報告せず、また過少に報告した場合については、役人や兵士に調査させて、みな処罰する。

それぞれの民が備蓄している穀物量を期日を定め、吏をとおして官に申告させる、このことは、より具体的にほつぎのようにもみえる。

某県某里某子家、食口二人、積粟六百石。某里某子家、食口十人、積粟百石。出粟米有期限。

何々県何々里誰々の家、労働人員二人、貯蔵粟米量六百石。何々県何々里誰々の家、労働人員十人、貯蔵の粟米量百石。粟米を供出する期限は何日まで。

民は、住所、氏名、家族数、積粟量、出粟期限を官に申告するのである。

この場合、号令篇の書き方からすると、申告は一定の形式を備えなければならないのであって、文書化の徹底した状況がうかがわれるのである。

こうして官は民に穀物の備蓄量を報告させ、必要があれば、供出させるのであるが、もちろん、無償で供出させるわけではない。

収粟米・布帛・錢金・牛馬・畜産、皆爲平直其賈、與主人券書之。事已、皆各以其賈賠償之、又用其賈貴賤多少賜爵。欲爲吏者許之。其不欲爲吏、而欲以受賜賞爵祿、若贖出親戚、所知罪人者、以令許之。

穀類、布帛、金錢、牛馬、畜産を収納するには、みなその価格を公平にし、その持ち主に「券」を交付し、記録しておく。戦争が終われば、みなその価格を以て賠償し、またその価格の高低多少によって爵位を与える。「吏」（下級の役人）になりたいものは、これを許し、それを希望せず恩賞の爵祿を受け、親戚や知人のために罪を贖うことを望ものがあれば、法令を以

てこれを許す。

官は民から基準価格で購入し、証書を交付する。戦争が終われば、証書に基づいて金額を支払う、しかも爵、吏職、刑罰とも交換できる、というのである。

戦時にあつて、官が民の備蓄する粟米を購入し、証書を交付する、という発想は号令篇ばかりでなく、雑守篇にもみられる。

民獻粟米・布帛・錢金・牛馬・畜産、皆爲置平賈、與主人券書之。

民が、穀類、布帛、金錢、牛馬、畜産を献納するときは、みなその価格を公平にし、その持ち主に「券」を与えて、記録しておく。

ここでも、官と民との売買関係は、「券」によって明示される。

官が民の所有物をなんらかの事情で接收する場合にも、文書が介在する。

諸可以攻城者、盡内城中、令其人各有以記之。  
事已、各以其記取之。吏爲之券、書其枚數。

敵が城を攻撃するのに役立つすべてのものは、ことごとく城中に移し入れる。その所有者のおののに記録させておく。戦争が終われば、おのおのその記録にもとづいて物件を受け取る。役人が「券」を作り、その枚数を書きつけておく。

—  
接收物を記録した「券」にもとづいて、戦後、接收物を返却する、言い換えれば、ここでも官と民との関係は文書によって明示されるのである。

号令篇にあつて、粟米、官の発行した「券」、爵、吏職、刑罰は、たがいに交換可能であり、「券」は、一連の交換過程の結節点に位置している。官の発行した「券」は、紙幣としての性格を、萌芽ではあるが、もっている、と考えられる。

注一 この一文については、雑守篇の類似の表現を参照し、呉毓江、山田琢らの校定と解釈に従った。

#### 4 「交換」をめぐる号令篇と孟子

戦時において、粟米を有償で徴発する、という号令篇の発想<sup>(三)</sup>は、換言すれば、粟米と貨幣とを「交換」する発想であるが、先秦の思想家のなかで、「交換」の問題に深い関心をよせた思想家は孟子である。

ここで、孟子と号令篇との交換にかかわる言説を、以下の諸点について対比してみたい。

- 1 交換のおこなわれる時
  - 2 交換のおこなわれる場
  - 3 交換への参加者たちの立場
  - 4 参加者たちのもつ情報量の格差
  - 5 なにとながに交換されるのか
- 号令篇にあつて、交換は守城戦の時という非常時に行われる。

交換の場はとくに設定されてはいない。

交換への参加者は、官と民とである。

参加者たちのもつ情報量の格差の問題については、号令篇は、守城戦の時における粟米購入について、つぎのようについて。



慎無令民知粟米多少。

慎重にして民に穀物の貯蔵量の多少を知らせ  
てはならない。

つまり情報は官が独占するのである。

交換されるもの、号令篇にあつては、粟米・銭金・牛馬・畜産と官の発行する「券」とが交換される。さらには「券」は貨幣、爵、吏職、刑罰と交換される。

孟子にあつて、これらの問題はどのように考えられているのであろうか。

孟子はいう。

古之爲市也、以其所有、易其所無者。有司治之耳。有賤丈夫焉。必求壟斷而登之、以左右望而罔市利。人皆以爲賤。故從而征之。征商自此賤丈夫始矣。（公孫丑下）

むかしの市場というものは、それぞれの参加者が自分の余剰物と自分の不足物とをたがいに交換する場であつた。役人はただこれを管理す

るだけであつた。ところが、ここに一人のいやしい男がいて、小高い丘に登り、市場全体をみまわして、こちらで安く買ってあちらで高く売って、差益をわがものとしていた。それで人々はこの男を卑しんだ。かくて、この男に税をかけることにしたのだつた。商人に税をかけることは、この男から始まつたのである。

あるいはまたいう。

子不通功易事以羨補不足、則農有餘粟、女有餘布。子如通之、則梓匠輪輿、皆得食於子。（滕文公下）

きみが、もし仕事の結果である生産物を流通させ、余分なものを以て不足なものを補うという務めを果たさなければ、農民には余剰の穀物があることになり、農夫の妻には余剰の布があることになってしまう。きみが、もしこれらを流通させれば、木工や車輪工といった手工業者もそれらを入手できる。つまり、きみのおかげ

でかれらは食糧を入手できる、というわけだ。

孟子にあつて、交換は、平常時に常に行われるのである。

交換の場としては「市」が設定されている。

参加者は、農民や工人といった一般の民である。

小高い丘に登り、「市」全体の需給状況をいち早く知つたもの、いわば最新情報の独占者は、孟子によれば「人みな賤しとなす」として否定される。情報は独占されてはならないのである。

また号令篇とは異なつて、有司、すなわち官は、「市」の参加者ではなく、参加者間の情報格差を解消し、交換の公平さを保つ「市」の管理者なのである。

交換されるものについて。上引の箇所では農民夫婦の生産する衣食の財と手工業者の生産する手工業製品とが交換され、また同じ滕文公上篇にみえる孟子と自給自足論者の陳相との対話においては、孟子は、陳相自身に、かれらの生産する穀物は、絹織物、鉄製農具、陶器をはじめとする「百工」の製作物と交換される、と言わしめている。

さらにここで注目したいのは、この交換にさいして、

交換の媒介物としての貨幣への言及が、陳相はもちろんのこととして、孟子にもまったくみえないことである。

号令篇における「券」が交換の結節点に位置し、その意味で貨幣の萌芽と考えられるのにたいし、孟子がなにゆえに貨幣、すなわち交換の媒介物を想定しなかったのか、これは別に考察すべき重要な問題だと思われが、ここでは、孟子における交換にさいし、交換されるものが、きわめて具体的な、日常生活にかかわるものであり、日々の生活のなかで消費され、「使用されるものであったことに注意したい。ものの経済価値は、いわゆる「使用価値」の方向においてのみ把握されていたのではないかと考えられるのである。

以上の考察によつて、「交換」にかんする号令篇と孟子との考え方の相違は明らかになるう。

注一 「墨子」十論二十三篇の経済思想、すなわち平常時の経済思想については、拙稿「『墨子』における財の交換」（『東洋の思想と宗教』九号 一九九二年六月）を参照のこと

## 5 里長から里民への情報伝達と文書主義

規則や上位者から下位者への命令、下位者から上位者への進言は文書によってなされる。こうした「文書主義」は、号令篇においては、守城の戦いという非常時に行われるのであるが、「文書主義」は非常時にのみ限られる方法であろうか、平常時には採用されない方法であろうか。

この問題を考えるとき、注目されるのは尚同上篇にみえるつぎの文章である（同様の文章は尚同中篇、下篇にもある）。

里長者里之仁人也。里長發政里之百姓。言曰、聞善而不善、必以告郷長。郷長之所是、必皆是之。郷長之所非、必皆非之。去若不善言、學郷長之善言、去若不善行、學郷長之善行。

里長は里の人格者である。里長は政令を里の人民に発している。

善と不善とを耳にしたら、かならず郷長に告

げよ。郷長の是とする事柄、それをかならず是とせよ。郷長の非とする事柄、それをかならず非とせよ。そなたたちの不善の言を去って郷長の善言に学べよ。そなたたちの不善の行を去って郷長の善行に学べよ。

ここでは里長が里民にむけて政令を発することとした政令の内容とが語られている。

戦国時代の里は、四百五メートル四方ほどの面積、戸数は千、人口は五、六千人である。<sup>(二)</sup> 墨子もそういう常識にしたがつて議論を進めているであろうから、これほどの人数にたいして口頭で政を発したとは考えにくい。文章のスタイルから考えて、内容を簡条書きにして里の各所に掲示したと考えられないだろうか。

注一 「墨子」上（渡辺卓 注訳 集英社）一七四頁参照。

## 6 号令篇の発想とその後の展開

以上、号令篇の発想をみてきた。ここで漢代文帝期

の実務派官僚、鼂錯（？一五四BC）が文帝に上書した文章をみよう。

今募天下入粟<sup>二</sup>県官<sup>一</sup>、得以<sup>二</sup>拝爵<sup>一</sup>、得以<sup>二</sup>除罪<sup>一</sup>。（漢書食貨志）

天下の人民に募つて、穀物を政府に納入させ、爵を受けることができるように、また罪を免除できるようにさせたらいかがでしょうか。

鼂錯はこのような提言をし、文帝はそれを実行する。入粟の石数に応じて、授爵の点数に差をもうけるのである（爵を点数で数える、という発想は号令篇にもみられる）。

ここにも、粟と爵と罪とがたがいに交換可能であることが、はっきり示されている。

鼂錯はこの提言は、匈奴の侵略から中国を防衛しなければならぬ状況でなされた。守城の戦いのさいに発想された号令篇と類似しているのは当然かもしれない。

注一 岑仲勉は、「墨子城守各篇簡注」において、号令篇

の納粟授爵の発想を「史記」平準書にみえる「武功爵を買つて吏となることができるようになつたこと」と、あるいは「卜式が財産を政府に供出して中郎となつたこと」の先例である、とする。

なお、「墨子」号令篇と漢代西北辺境の軍事都市の遺構から発見された軍事にかかわる内容を持つ漢簡との比較、対照の問題については、陳直「墨子備城門等篇與居延漢簡」（『中国史研究』一九八〇年第一期）が先駆的論文である。

7 —  
おわりに

以上、号令篇の「文書主義」を考えてきたのであるが、「文書主義」を実行する場合、つぎの二点が前提となる。

- 1 すべての人民が文字を読める。
- 2 すべての人民が規則と命令とをみずから認識しなければならぬ。

人民が文字を読めなければ、命令も行き渡らない。中国古代の人民の識字率がどの程度であつたかは、明らかではないが、号令篇は、すべての人民が、簡条書

きされた簡単な文章ならば読める、と前提していたはずである。だからこそ、「文書主義」という発想も生まれるのである。

人民は文字によって規則と命令を認識し、守城の戦争に直接に、あるいは間接に参加する、人民は支配される客体ではなく、みずから城邑の運命にかかわる主体であった。

「論語」に「民可使由之、不可使知之」（泰伯）とある。「論語」の民は、なにも知ることのできない存在とされている。民は、もっぱら支配の対象、客体であつて、号令篇の人民とは異なる存在である。

戦争についていえば、「論語」では、民は侵略者によつて一方的に被害を受ける存在であるが、号令篇の民は、侵略に抗し、わが城邑を守つて勇敢に戦う存在である。<sup>二</sup>

注一 小稿は二〇〇一年、七月、中国・北京で開催され

た第五回墨学国際研討会に提出した中国語論文「關於『墨子』號令篇的文書主義」にもとづき、若干の補訂を加えたものである。

なお、中国語論文は二年後に発表される研討会の報告

書に所収される予定である。